

八木健に学ぶ滑稽俳句 10

高橋 素子

松一本残せし津波三月忌	松本夜詩夫
春愁など贅沢なこと津波痕	山元志津香
ぼうたんのくづほるるかに人逝きて	深沢暁子
牛飼ひの三代終る走り梅雨	鈴木勘之
俗称を死の灰秋刀魚の目が潤む	瀧春樹

(俳句新聞「東日本大震災を詠む・畢生の七句」より)

昨年の秋、心待ちにしていたNHK・BSプレミアムで「日本縦断こころ旅・秋の旅」の放送が始まった。俳優・火野正平さんが、視聴者のお便りをもとに、愛車のチャリオでNHKのスタッフと共に、北海道を皮切りに、愛知まで十三都道府県を走る旅である。この「秋の旅」はこの一月末で無事終了。番組が始まって以来三〇四日目で、四七都道府県制覇の快挙となった。

正平さんの滲み出る人柄と、お便りの忘れられない思い出とが相俟って、視聴者の胸を打つ「心の風景」が映し出される。前回までに二四八日をかけて、四三道府県四〇〇〇kmを自転車で行きぬけた。二六二日目には、岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」に辿り着く。大津波に飲み込まれた七万本の高田松原の中で、一本だけ残り復元作業が行われた「希望の松」である。相棒のチャリオに乗り「人生下り坂最高」が口癖の正平さんが、いつもと違う緊張感でもって、遅々として進まぬ復興に見入っている。

心に残る思い出の地への心の中での旅は、誰しも可能である。しかし実際には今はどんな姿に…と、恐れにも似た疑問に答えてくれる人気番組で

もある。コンクリートから垂れ下がる無惨な鉄筋・ビルの屋上に乗り上げた船・まるごと津波に飲み込まれた廃墟の姿は、誰の心にも生涯忘れえぬものとなったが…町が、田が、家族が、飲み込まれてゆく光景を目の当たりにした被災地の方々の痛恨の思いは、少しずつ少しずつ復興が進む今も想像するに余りある。

雨乞ひに喜雨の出水となりにけり 八木健
傍題にゲリラを加へむ秋出水 八木健
暴れ梅雨愚陀佛庵を飲み込めり 安永竜矢

二〇一〇年七月十二日早朝に起きた、ゲリラ豪雨による子規・漱石所縁の愚陀佛庵全壊のニュースがまだ人々の記憶に新しい今また、台風十八号によるゲリラ豪雨の出水による京の渡月橋の水没光景は、日本全土を「じえじえじえ」の驚きの渦に巻き込んだ。異常気象である。掲出の師・八木健の句に詠まれたように、雨水は大切な慈雨にもなるが、過ぎれば恐ろしい出水を引き起こす。

今回も古今の名句と師匠・八木健の句を比較検討してみたい。

乳母車夏の怒濤によこむきに 橋本多佳子
土用浪飛沫を空に置き去りに 八木健

多佳子の句は一読してどきっとさせられる句である。激しい波しぶきが乳母車にまで飛びかかりそうな荒磯の怒濤に対して、横向きに置かれている乳母車。生命の危機感を構成的手法で表現した句であり、師・誓子の影響を強く受けている。

掲出の師・八木健の句は、土用の大きな浪のうねりが、荒磯に打ち付けられて、空にしぶきとなって飛ぶ一瞬の光景を捉えて句に詠んでいる。「俳句は瞬間を詠むもの」という師匠の教えの典型的な佳句となっている。

顔出せば鴟迸る野分かな 石田波郷
台風のあとの一家のお片付け 八木健

波郷の句の季語は、「鴟」、「野分」の二つあるがいずれも秋の季語である。「窓から顔を出すと、吹き起こる野分の中に、いきなりキーッキーッと鳴く鴟のかん高い声が湧き起こった。そして迸（ほとばし）るようなその声は野分にさらわれていった」との句意であるが、この「迸る」は野分の風の感じも幾分かは表している。「顔出せば」には、うっすらと俳諧味もある名句と言われている。

師・八木健の句は、昨夜の台風が嘘のような青空の下、折れた植木や飛んだバケツを一家総出でお片付け。「台風一過」である。実に、上手い地口の句である。

筆りたる一羽の羽毛寒月下 橋本多佳子
寒月の監視下にある雪達磨 八木健

一羽の鳥の命が人の手によって殺められ、筆られ、今は皓皓と輝く寒月の下に、筆られた羽毛のみが置かれている。ただ物だけを置いたこの即物的手法は、師・誓子から多佳子が学んだものであると、言われている。これは厳しい生の姿の確認であり、それが寒月の凍てつく光の中に置かれたものだけに、非情美の極致の名句となっている。

師・八木健の句は、冬の凍てつくような月光の下に、まるで監視されているかの様に、ぽつんと置かれた雪達磨。昼間は子供たちの賑やかな歓声に包まれて、幸せであったろうにと、童話をも思いおこさせる擬人化の佳句となっている。